



北方領土隣接地域の

「啓発活動の現状と課題」

2025年4月30日

北海道標津町

企画政策課



Shibetsu Town

標津町は・・・

面積 624.69km²（東京23区の面積とほぼ同じ）

人口 4,731人（令和7年4月1日現在）

世帯数 2,343世帯（　　　　　〃　　　　　）

主な基幹産業は酪農業と漁業

オホーツク海に面し、洋上わずか24km先には近くて遠い島「国後島」が、その大きな姿を見せています。

標津町



Shibetsu Town

標津町は・・・



Shibetsu Town

「ゲートウェイ」地域として

ゲートウェイ＝玄関口

本土在住の日本人と北方四島在住のロシア人との交流拠点、人道支援拠点としての機能。

四島渡航の枠組み

- ・ 北方四島交流（いわゆる「ビザなし交流」）
：相互理解の増進と領土問題解決への寄与を目的
- ・ 北方墓参
：元島民とその家族の墓参のための訪問
- ・ 自由訪問
：元島民とその家族の最大限簡易化された訪問
ex) 歯舞群島への訪問、出入域手続き箇所の複数化 など



「ゲートウェイ」地域として 四島在住ロシア人の受入



手打ちそば体験

自分で手打ちした
そばを昼食にとる



Shibetsu Town

「ゲートウェイ」地域として

四島在住ロシア人の受入



着物の着付け体験

日本の伝統文化の
体験



Shibetsu Town

「ゲートウェイ」地域として

四島在住ロシア人の受入



町内の園児、小中学生
などとの交流

地域の方による屋台
ミニ運動会
よさこい体験 など



Shibetsu Town

「砦」としての地域

陸上自衛隊 沿岸監視隊

- ・ 第301沿岸監視隊（稚内及び礼文）
- ・ **第302沿岸監視隊**（標津及び羅臼）
- ・ 与那国沿岸監視隊（与那国）

海岸を航行する船舶の早期察知
空域を飛行する航空機の早期察知



「砦」としての地域

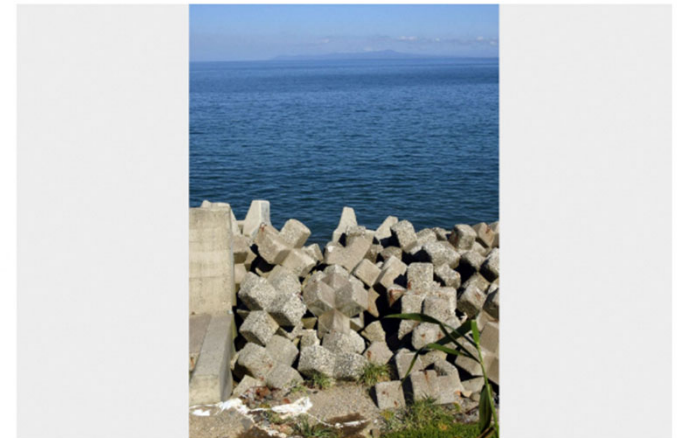
※2022/10/8 北海道新聞

2021年8月 実際に…

北方領土・国後島から対岸の根室管内標津町へ、ロシア人男性（38）が根室海峡を泳いで渡ってきた。

（中略）

19日午前4時ごろ、標津町の海岸に到着し…



昨年8月、ロシア人が国後島（写真奥）から泳ぎ着いた、市街地まで約7キロの標津町の海岸＝9月26日

昨年の夏、北方領土・国後島から対岸の根室管内標津町へ、ロシア人男性（38）が根室海峡を泳いで渡ってきた。

男性はロシア中部イジェフスク出身で、3年前に国後島南部の泊（ゴロブニノ）近郊に移住した。男性が共同通信の取材に語ったところによると、昨年8月18日午前5時ごろ、国後島をウエットスーツとシュノーケルを身に着け、荷物を防水性の袋に入れて出発。翌19日午前4時ごろ、標津町の海岸に到着し、出発前に両替した日本円3万円を使って町内のホームセンターで服や靴などを購入した。

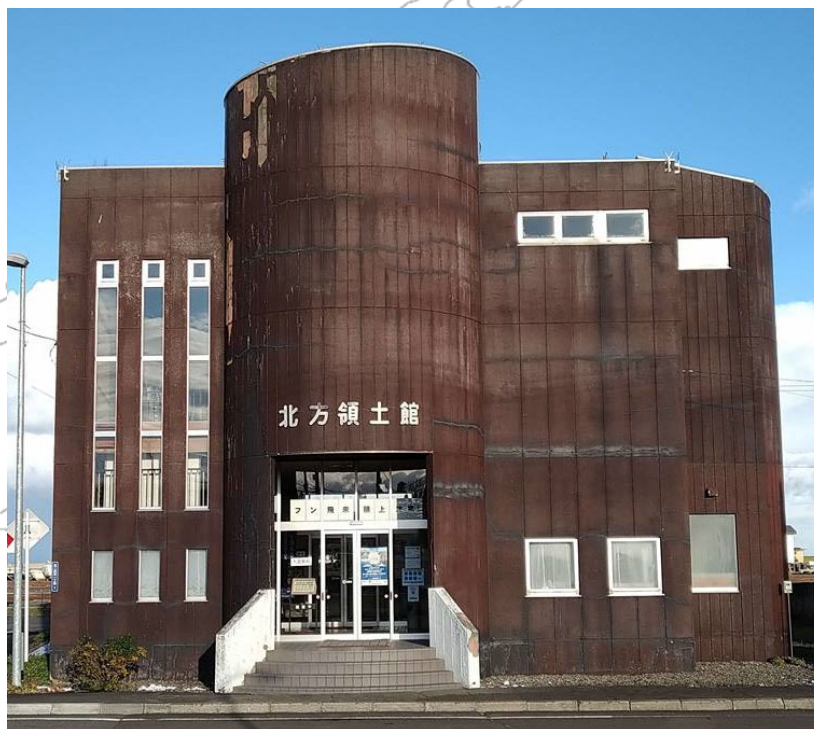
男性は同日夕、町内で警察に保護された後、「亡命したい」と難民申請したが、不認定となったため、不服申し立ての「審査請求」をして日本国内に滞在中だ。



Shibetsu Town

標津町の取組み

①北方領土館（啓発事業の拠点）



- 外務省管轄の北方領土復帰期成同盟が建設した北方領土啓発施設（鉄骨造2階建343.19㎡）で、管理は標津町が受託している。
 - オープンは昭和54年12月で、築46年を迎える。
 - 現在はパネル展示が主体。
- ※ R4年度教育旅行入館者数13校（1,295人）



標津町の取組み

①北方領土館（啓発事業の拠点）



Shibetsu Town

標津町の取組み

①北方領土館（啓発事業の拠点）



Shibetsu Town

標津町の取組み

②北方返還要求署名運動



千島歯舞諸島居住者連盟標津支部、同後継者の会と町が連携し、返還要求運動強調月間を軸に実施。

8月 町民祭り水・キラリ

9月 あきあじまつり

署名活動を実施しているほか、北方領土館・サーモン科学館・役場庁舎に署名コーナーを常設。



Shibetsu Town

標津町の取組み

③北方領土パネル展



8月の北方領土返還運動全国強調月間中に、町民に北方領土の関心を高めていただくため、標津町と千島歯舞諸島居住者連盟標津支部の共催により、毎年、標津町生涯学習センターでパネル展を開催しています。



標津町の取組み

④元島民の声「デジタル化」事業

元島民1世の平均年齢が87歳を超えており（R5年度時点）、返還要求運動や北方領土問題の啓発活動にあたり体力的な負担が増しているため、その活動の中心は後継者である2世や3世が担っていく方向にシフト。

話に含まれる感情や熱量といったものまでは知識として習得することでは得られないものであり、啓発や学習における効果が長期的に漸減していく懸念があるため、デジタル動画を作成した。

児童・生徒向けと年配者向けなど3パターン作成



標津町の取組み

④元島民の声「デジタル化」事業



▲ 元島民との座談会

▼ 元島民へのインタビュー



Shibetsu Town

今後の啓発における課題・・・

■ 元島民1世・2世の高齢化と 後継者対策

平均年齢は1世で89歳、2世でも60歳を超える。

3世以降、世代が進むにつれ、原体験のある1世の記憶・記録の継承が困難となる。

令和5年にインタビューをした方で亡くなっている方も。

■ 施設の老朽化と 啓発事業の持続化

隣接地域の啓発施設では、学校や団体・企業などの北方領土学習の受け入れと講話の場としての基盤として活用。

情報発信や北方領土学習の受け入れのきっかけ・動機づけのための母体として、今後も活用していく。



今後の啓発における課題・・・

啓発の取組みにおける デジタルの活用

実際に隣接地域に足を運んでの学習も効果的ではあるが、現実的に遠く、現地に来ていただくことのハードルがある。

デジタルを活用し、WEBで場所を問わない啓発の取組みを進めたい。

他の取組みとの 有機的な連携

隣接地域には都市部にはない地域資源があり、アクティビティや自然・文化学習などと有機的に連携したプログラムを提案していきたい。

その他、多言語対応、バリアフリーやユニバーサル対応などに検討の余地があると考える。



ご清聴ありがとうございました。



Shibetsu Town